

日野市子ども・子育て支援会議 第1回地域支援部会（要約）

議事録要旨

出席委員 11人中10人出席

欠席委員 原口（途中から参加）

日 時 平成26年3月31日（金） 18:30～20:30

場 所 市役所1階 101会議室

次 第

- 1 開会
- 2 会長挨拶
- 3 地域支援部会の役割と前回までの振り返り
- 4 本で行うこと
- 5 議事
 - （1）対象事業及びニーズ調査結果について
 - （2）対象事業説明
 - （3）市の考え方について
 - （4）その他
- 6 閉会

〔配布資料〕

資料1 第2回子ども・子育て支援会議 質問事項回答

資料2 「量の見込み」の算出方法（概要）

資料3 教育・保育及び地域子ども・子育て支援事業の「量の見込み」年度別報告シート

資料4 事業概要シート

資料5 ニーズ調査集計分析表（就学前児童）

参考資料 ・一時保育稼働率（参考）・実施場所一覧

・（就学前児童）クロス集計表〈速報値〉

・単純集計表（各種）

・知っ得ハンドブック 2013

1 開会

- ・今回の地域支援部会は、地域支援事業について、調査・審議をするもの。

2 会長挨拶

- ・2月に長崎から福島まで、子ども・子育て会議の地方版が、どのように行われているか、先進事例をヒアリングしてきた。先進事例といわれるところは実は会議が活発で、忌憚なく意見を出し合うということが大事。
- ・この会もできるだけたくさんの方が意見を言っていただくような会にしたいと思う。ここで何か決めるということではなく、私たち市民、あるいは子育てをしている人たちの意見を踏まえ、最終的に日野版を決めていくということになると思うので、我々がどのくらい意見が言えるかが大事であると思っている。

3 地域支援部会の役割と前回までの振り返り

- ・地域支援部会については、事業計画の必須記載事業、各年度、子ども・子育て支援事業の「量の見込み」「確保方策」「実施時期」を検討するということになっている。また、地域支援事業といわれる、13事業についても意見を出し合っていくことが役割になる。
- ・スケジュールについては、7月に全体会の第3回が開かれる。地域支援部会は、7月の全大会までに2回開催を予定し、今回は1回目です、2回目がこの会議の後に日程を調整する。
- ・今回の部会は、学童クラブを除いた事業について、ニーズ調査の結果及び実態報告を聞いて、検討課題踏まえ、計画を作成していく。
- ・地域支援事業については、新規事業は一部あるが、ほぼ全て複数年の実績を踏まえている事業になる。国の指示を踏まえ、日野市としてニーズ調査の結果及び実績を踏まえたうえでご意見を伺う。
- ・計画策定にあたり、基本方針等については、第3回の全体会議で骨子をお示しする。

4 本日举行こと

- ・平成26年度中に計画を定める前提条件として、国が指定した事業の「量の見込み」、その提供体制の「確保策」、その必要性や課題や方向性について、御意見をいただく。皆

様に御意見をいただく材料として、就学前児童の家庭世帯にお願いしたニーズ調査の結果や、対象事業の概要や利用実績を踏まえ、ご意見をいただき、今後の計画に生かしていく。

5 議事

(1) 対象事業及びニーズ調査結果について

- ・ニーズ調査については、調査票を 1,600 人の方々に出して、5 割以上の方に返答をいただいた。これを国から示された計算式に沿った形で数値が出ている。
- ・「量の見込み」の算出方法については、国からマニュアルが示されている。最初に現在の家族類型を算出して、2 番目に潜在的な家族類型を算出する。3 番目で教育・保育業務の量の見込みの算出という流れになる。
- ・家族類型については、タイプ A～タイプ F まで 8 種類、1 人親の家庭、父母ともフルタイムで働いている類型、母のうち 1 人がフルタイムで、もう一人がパートタイムで働いている等、組み合わせで 8 つの家族類型ができる。これが現在の家族類型。
- ・次の潜在的家族類型については、現在の家族類型で、例えばパートタイムからフルタイムに移りたいとか、専業主婦の方で、フルタイムで働きたいとか将来は働けると明らかにアンケートの結果から判定できるような方を、そちらのほうの類型に移すという作業がある。
- ・この潜在的家族類型をベースに、そこにおける将来の事業ニーズという数値をつくっていく。
- ・次に、人口の予測をする。27 年度からどれだけの児童数になるかを推計する。コーホート法という厚労省の方で決められたもの。コーホートとは同時出生集団という概念で、同時出生集団が 1 年たつごとにどれだけの数値になるかの移動率と、あと婦人・子ども比変数を使って将来人口の推計をする。これに先ほどの潜在的家族類型というものを掛け合わせると、いわゆる潜在的家族類型別の推計人口が出てくる。それをもとに、各事業等に対する利用意向率を掛けて量の見込みを出すという形が、基本的なパターンである。

(2) 対象事業説明

- ・時間外保育事業、現在保育園については 7 時～18 時まで保育を実施している。そこに間

に合わない方等のニーズに対応するために、現在公立 12 園、民間 24 園、計 36 園ですが、延長保育を 20 時まで実施している。実績については、約 2 万人程度という状況。

- ・ショートステイの利用、これはお子さんを養育するという観点で、保護者が疾病その他の理由、お仕事等でお子さんの養育が一時的に困難になる場合に、宿泊を伴ってお預かりする事業。対象が 2 歳～小学校 6 年生までのお子さん。利用料については一般世帯が 1 日につき 3,000 円で、1 泊 2 日であれば 6,000 円で、養護施設のほうに委託をしている。
- ・1 日の定員が 4 名ですが、平成 21 年度、年間で 120 日の利用があった。
- ・地域子育て支援拠点事業については東京都では子育て広場（地域子育て支援拠点事業）として実施している。概ね 3 歳未満の児童及び保護者の交流の場の提供。子育て等に関する相談及び援助による指導、地域の子育て関連情報の提供、子育て及び子育て支援に関する講習などの実施、これらを初めとする総合的な子育て支援の拠点で、日野市内で 23 カ所運営している。乳幼児の親子が気軽に集い語り合い交流する場を提供し、地域で子育てを支え合う関係づくりと相談体制を充実させることで、親たちの負担軽減を図ることを目的としている。実績については、来訪者数等の延べでの人数になるが、年度を追うごとに来場者数がふえている。
- ・一時預かり事業。日野市では子ども家庭支援センター一時保育事業、ゼロ歳児一時保育事業の 2 つは委託事業として実施している。それ以外に、民間の保育園で実施している一時保育事業がある。保護者の方が育児疲れや、急病や、仕事等で、一時的に保育が必要となった場合に、お子さんをお預かりする事業。ゼロ歳児のほうでは生後 3 カ月～1 歳までをお預かりし、それ以外の一時保育のほうでは 1 歳～就学前までのお子さんをお預かりしている。利用時間については、委託で実施している多摩平の一時保育は、月曜日から土曜日まで、民間の保育園は月曜日から金曜日まで実施している。時間は 8 時半～17 時で、施設数は全部で 7 カ所。
- ・子育て短期支援事業のトワイライトステイ。国の調査では、このトワイライトステイについても、一時預かりの一部として捉えられている。また、ファミリーサポートセンター事業についても、国の調査では、一時預かり事業の一部として数値は捉えている。
- ・トワイライトステイ事業は、御家族の入院や残業等で、保護者の帰宅が夜間になる場合、夕方から夜まで子どもを預かる事業。対象児童は 1 歳～小学校 3 年生までで、利用時間は 18 時～22 時。日曜、国民の祝日、年末年始以外はお預かりをしている。利用料は 1

回 1,000 円、減免制度がある。ほかに移送費として 1 回 400 円、夕食費用が 1 食 500 円となっている。定員は 7 名。

- ・ファミリーサポートセンター事業は、日野市からの委託事業で、NPO 法人市民サポートセンター日野に委託して実施。本部が多摩平、支部は高幡福祉支援センターにあり、手助けが必要な方が依頼会員、手助けができる方が提供会員として事前に登録をし、ファミリーサポートセンターを仲介とした子育て等を地域で支え合う有償のボランティア活動。依頼会員でもあり提供会員でもある両方会員もいる。会員は、組織として相互援助活動の調整を行い、また多様化するニーズに対応するため講習会の実施などにより、会員の方の資質向上も図っている。
- ・育児援助につきましては、生後 3 カ月～小学校 6 年生までが対象になる。保育施設までの送迎とか、保育施設、学童クラブなどについては、保護者の方が病気、保護者会懇親会などの外出の際の保育などを行う育児援助。産前産後の家事、新生児の沐浴などの補助、掃除、食事づくり、洗濯、買い物、話し相手などの援助を行う妊産婦家事、高齢者援助があり、どちらも会員数がふえている。
- ・病児幼児保育事業は、保育または看護に欠ける子どもが、集団保育、集団育成の困難な場合に、一時的に保育を実施するところに預けて対応する。市内に 2 カ所、多摩平地区と高幡地区に、具体的にはひよこハウスとたかはた北保育園です。たかはた北保育園は病児ではなく、病後児のほうを対応している。
- ・利用者支援事業は、今回の地域子ども・子育て支援事業の新規事業として、国が指定し見込みを必要とする事業の中の 1 つとなっている。新規事業のため実績はないが、事業内容は、小学校就学前の児童と、その保護者や妊婦、学童期の児童とその保護者を対象に、多様な子育て支援に関する給付する事業の中から、その方にふさわしいメニューを選択できるように、地域の身近な立場から支援をするもの。地域の子育て支援に関する施設で行われている事業等について、情報を継続的に収集し保護者に提供する。相談に訪れた保護者等の個別ニーズを把握した上で、適当な行政窓口や子育て支援ができる施設、事業等を提供することで利用を支援したり、適切な専門機関につないだりするというものも想定している。先進事例として、横浜市の保育コンシェルジュ事業、松戸市の子育てコーディネーター事業が挙げられている。
- ・続いて、ニーズ調査結果及び分析について説明。
- ・時間外保育事業数は、実績と見込みの乖離が出ているが、認知度については 10 年前と

比べると、上がってきている。利用経験、利用希望についても、一定程度の需要はあると考える。今後の展望として、延長保育事業については地域支援部会の前に行った保育・教育部会で、保育園は何園つくっていくとなったときに、当然、付随して延長保育事業も実施していく。

- ・ショートステイ事業ですが、実績数値と見込みの数値が非常に近い数字が出ている。これだけ見ると、潜在的な利用の見込みについては、現時点のものと余り大差がないという状況。10年前からどんな形で変わっているかについては、認知度は、格段に上がっており、13.4%から 55.4%。実際の利用は、10年前の 0.4%から 0.6%。希望者は、年々下がってきている状況。より困難な家庭の方がやむを得ず預ける、泊まりを伴ったものであるため、そういう形の御利用が、非常に多いというところで、利用する方々が非常に限定される状況がある。今後の展望としては、それ以外の方への利用も促進することによって利用率を上げていきたい。
- ・地域子育て支援拠点事業は、子育てひろばである。ニーズ調査が 3,959 人で、実際の実績、例えば平成 21 年度が 109,341 人となっているが、実績は年度で延べ人数であるが、見込みは、月単位なので単純、見込みを 12 倍すると 4 万 7,508 人になっている。実際に利用されている方、実績値と比べると、この潜在的な利用見込みはまだ半数近くであり、数値的には両者、非常に利用できているという状況。実際の認知度は、アンケートの結果だが、もっと知っている方が多いと思ったが、57.5%と減っている状況。その中で利用希望の方が 29.4%、そして 26.1%の方が利用できている。利用したい方は利用できているのかなととらえている。23 あるひろばはマップがある。近くにあるって知らなかった等、その辺の周知について、しっかり考えていきたい。また、利用者がふえていく中で、相談もふえているため、職員のスキルアップ等をしっかりとしていきたい。
- ・一時預かり事業については、幼稚園における一時預かり、2 号認定による定期的な利用、それ以外ということになる。上の 2 つについては、実績値が書いていない。これについては、実は私立の幼稚園等で一時預かり事業を実施しているが、その資料についてまだ入手ができていない状況であるため、実績値がまだ載っていないという状況。従って、この議論については、今後の課題とさせていただきたい。
- ・上記以外の事業については、子ども家庭支援センターの行っている 7 か所の一時預かり事業、夕方から夜にかけてのトワイライト事業、ファミリー・サポート・センターの中で育児支援を実施している。この 3 つが一時預かりということで考えております。その

実績値として、平成 21 年度が 10,924 人、27 年度は 12 万 8,565 人で、約 10 倍以上の見込み数字というのが出ている。一時預かりについては、認知度は 7 割を超えているという状況で、10 年前 40%だったものが 70%を越えているため、大部分の方が一時預かり事業が市内にあると認知していただいていると考えている。実際に利用希望が 30.4%に対して 16%の利用で、利用したい方の半分しか利用できていない。これは何かの理由があると考えている。

- ・実際にいろんな方が利用されるが、子ども家庭支援センターとしては、本当に利用したい方が利用できないと困る。利用したいときに利用できるような形での PR をしたい。特に懸念しているのが、今後の展望。出産後の体調不良、回復や育児負担の軽減や、親子でのひきこもり等のために、積極的に利用していただきたいと考えている。
- ・トワイライトステイ。認知度は 10 年前の 9 %に比べて半数以上の方がこういう事業があるということは知っているという状況。利用の認知度に比べて、希望者や経験者は非常に少ない。全体の 1 %で非常に少ない。繰り返して利用される方が非常に多いため、パーセンテージでいうと、このくらいの数になってしまうという事情がある。
- ・現在はお仕事等でどうしても迎えに行けない、こういう方々のための補完的な利用が非常に多い。ただ、このトワイライトステイが、夜 10 時までどうしても預けなければいけない方が、自分が預けられることに気づいていただいて、実際に必要なときに使っていただく利用方法ができるよう今後しっかりと PR していきたい。
- ・ファミリー・サポート・センター事業。認知度が非常に高い。5 年前に 73.8%で、現在も 73.8%で知っている人は非常に多いという状況。ただ、利用希望に対する利用経験が 3 分の 1 以下で、利用したい方が完全に利用できている状況ではないなというところは、この数字から見える。実際、今、提供会員も、利用会員も非常にふえている状況で、その中でやはり対応困難なケースも非常にふえているという事情がある。そのような困難なケースにどう対応していくか、実現可能なサービスの整備というのが今後必要と考えている。
- ・病児保育事業。認知度はかなりふえてきている。利用経験、利用希望の数値が若干過去に比べると下がっているという状況。この「そのときの 1 年間の対処方法は」という設問で、ほとんどの方が、お父さん、お母さんが休んで病院に連れてったりしていることがわかる。また、「利用したい」、「利用したいと思わない」という設問があり、「利用したいと思わない」という方のほうが多かった。仕事を休むことができる職場環境が整っ

たとか、それとも、子どもを第1に考えて病気のときは一緒にいたいという思いが強かったのか、数値上では出ていないが、考えられるものとしてはそういうことでないかと考えている。今後は、万が一ということもありますので、引き続き病児保育事業については推進していくということになると思う。

【委員の主な質問・ご意見等】

- ・この量の見込みの部分は、市の考え方について大きなギャップがもしかしたら生まれているのかなと思う。実際、例えば利用希望、ショートステイなんかも結構減っている。利用希望はやはりどういう状況でこれが減っているのかも気になる、トワイライトステイもそう。市の考え方となると、ある部分に関しては全て充実させていこうという方向で行くのだと思う。多分、そういう部分に重点を置いて、この会議は進めていくと思っているが、私たちが見ると、この量の見込みが余りにも数字的にちょっと右と左で、利用希望が減っている部分をどうしていきたいのかということ逆を聞きたいというのが、実際の今の気持ち。

→数字がかなり離れているところ、その辺については、我々も、びっくりするようなところもあった。

→この就学前のアンケート調査っていうのは全部で約80問ある。膨大な量。その中で実際に量を数値、数字を書いていただくところをとってきている。その数字をお書きいただいてないサンプルが多い。つまり、余りにも全体の設問数が多いので、それに基本的には丸をしていくだけで精いっぱい、具体的な数字を書くところまで目配りがいかない、つまり積算のベースになっているサンプル自体が極めて少なくなる、という要因が1つある。

- ・もう1つ、多めに出るところというのは、「今後、ぜひ利用したいと考える事業をお書きください」とあるけど、これが複数回答になっている。複数回答とは幾つでも丸がつけられること。そうすると、矛盾回答も全部取り込んでしまうということ。幼稚園も保育所も使うとか、そのような回答が全部オーケーになる。そういうところで全て高めに出てくる、利用意向のところは高く出るところがある。
- ・それから、先ほどの数値を書くところを書いていただける方が少ないと、どういう問題が起きるか、サンプルが小さくなる。例えば、50ぐらいのサンプルはあっていいところが10とか、5つぐらいしかないサンプルになる。その中で1人が異常値を書いた場合、

普通だったら5とか6という数字が入いるところに、1人が100という数字を書く人が出てくると、その異常値で全体が影響を受ける。そういうこともある。今それについて全国的にどういう補正をしていくべきだとかいうような議論は出てくると思う。

- また、アンケートでここに答えた人はここに答えてくださいっていう指示があっても、そのとおりに答えない人がたくさんいる。つまり答えがあれば、書けるところはみんな書いてしまう人がいる。その人の数で割り込めば、母数が大きくなるため、当然比率が低くなる。限定をきちっとかけてやると、答えた数ですとか少ないから、当然、意向率が高くなる。従って、何を持って分母とすべきか等、多分これから議論になると思う。今後、細かい検証は続けていきたいと思っています。
- これは全国共通で国が示した書式に基づいて、日野市としても算出した。他市の状況、東京都内の他市、市町村の状況を見ても、同じような状況がやはり出ている。数字の大小の差はあるが、方向としてはやっぱり大きく振れる、もしくは小さく振れる、そういう傾向はやはり類似点が多く出ている。都も、国も、そういう状況は把握をした中で、国も子育て支援会議を開催している。都も開催している。何らかの方向性、補正の仕方等ですね、出てくることも今の時点では想定される。
- 利用者支援。こちら新規ということで、取り組みとして情報提供ですよ、取り組みとして全然新規でもないのに、何で国が新規だってやったのかっていうのも正直よくわからない部分もあるが。ここに書いてある、まさにきょう配られた「知っ得ハンドブック」は日野市でやっている情報提供ですよ。そのほか、窓口でいろんな利用に関して質問があって、それに答えているみたいなどころっていうのも、各機関でそれなりに統計もとっていると思い、それをまた別の視点でまとめるっていうのは非常に難しいとは思う。今回予算がつく案であるため、新たにお金をかけて何かやりなさいっていうようにも聞こえる。今まではここが不足だからこういうことはやるならいいのだが、これもやっている、今まで窓口も置いている、さらにお金をかけるから何かってなると、またそこに二重、三重の、限りある予算が割かれてしまうと、それはそれで市民として不安もあると思っている。国が何で、これに力を入れろと言っているのかっていうことと、日野市としてせっかくだからこういうところには力を入れたいなと思っているような部分があるのであれば、そういうところを聞きたい。

→「利用者支援どうするの」と聞かれるが、例えば日野市でいえば、児童館だとか、保育園だとか、その中でちゃんと対応するので、お金がつくから何か事業化しようとは考え

ていない。

- ・もっとうしてほしいっていうのがあれば、ここに盛り込んでいただける余地があるという、そういう理解でよいか。
- ・せっかくこういうことがあったのであれば、もう一度真っさらにしてね、これも含めて、どういう形ができるかっていうことを考えていくことは必要なのではと思う。
- ・このデータは興味深かった。例えば 70%越えているのに、逆に越えていても利用件数は少ないなとか、何か改善が必要なのかなとか。それから、利用希望についてはここが高く、ここが低いなど。実際には認知度が高いのだけど、そんなに高くないなとか、そういう傾向って結構出ている内容だと思った。
- ・これから計画を立てていくということなので、今後の展望というのを基本に考えていくということになると思う。利用希望が減っているのは市としてどう考えているかというところになると、これも1つ1つ分析していくしかないと思う。

→地域子育て支援拠点事業や一時預かり事業はある意味、誰でも利用できるようなものとして、こちらのほうについては、やはり利用希望もそんなに下がってはいない。やはり PR 不足、使える人が使えていない事情もあるのかもしれない。事業によって内容が違っているので、それぞれ対策をこれから立てていくというところで、今後 27 年度からの5年間の計画というところに生かしていきたい。

(3) 市の考え方について

- ・日野市としては国が示すものが全てではないというところも、正直考えている。尊重はしなければいけない。この調査票の中でこういう項目についてピックアップをして、数として出すというところを明示している。これはこれとして尊重はしなければいけないと考えている。ただ、日野市の実態、日野市の子育て支援に対しての結果や経過、方向性。このアンケートをフルに活用し、かつ実績も踏まえ、傾向を見据えた中で最終的には判断をしていただきたい。
- ・日野市については、かなりの度合いで子育て支援策、総合的に近年進めている。予算としても多大な予算の配分をかけているところ。これはもう日野市としても自負をしているところ。質を落とさない形で、より市民サービスの充実がどうかわって、27年度から31年度の見込みというところになる。一定の時期にはその結果を出さなきゃいけないが、最終的にはやはり実績というところが1つキーワードになると思っている。先ほど、少

し部会長のほうからも冒頭でいただいたと思うが、この会議の役割としては、やはり PDCA、きちっと先に立てたこの 5 年の計画が、この 5 年の中できちっと回しているのか、その見込みは合っているのかいないのか、その辺の PDCA をきちっと行っていくっていうのも重要な役割の 1 つ。先のことは誰も予測ができないというところもあるので、その辺も含めて日野市としてはきちっとやっていきたい。

【委員の主な質問・ご意見等】

- ・上の娘がちょうど 1 歳ころに、万願寺の地域子ども家庭子ども支援センターのひろば。やっぱり保育園に行っていなかったので近所にお友達とかいなくて、そこに通ううちにお母さん仲間ができ、5、6 人ぐらいで毎回そこで、お昼も食べることができますし、雨の日でも遊ばせることができたので、本当毎日のように通って遊んでいた。その仲間とは、今度、中 2 になったが、今でもずっと続いて、その関係が。母親同士ももちろん今でもたまにランチしたりして、こういう事業っていうのは本当にいいなと思って、日野市は、子育てしやすいまちということを本当に実感している。
- ・病児保育事業について、「知っ得ハンドブック」を見たら小 3 までの子が利用できる。インフルエンザにうちの下の子が小 4 でかかったときに、パートで働いていて、どうしてもずっと休むっていうのが無理。また、主人も働いているため、もちろん休むことが無理でした。そのときに本当に一番ひどいときはどうしてもってことで、主人に半休とかとってもらって休んでもらった。ちょっと落ち着いたときに 1 人で留守番させて、インフルエンザで「ちょっと気持ち悪くなっちゃった」っていうので、私が携帯に出られないので、主人のところに泣きながら電話をしてきたっていうことがあって。何かそういうときに、ちょっと見てもらえる、家でちょっと見てもらえるような、サポートしていただけるような、そういうのがあったらいいなって感じた。
- ・フルタイムで働いていて、今、子どもは上が今度中学、下の子も 3 年生、学童にお世話になっている。2 人とも保育園に、小金井市から引っ越してきたが、0 歳から入れて、フルに働いていた。企業のほうも、いろいろ働く親とかに理解もあるのもあったと思うのだが、やはり病気のときっていうところは大きいかなと思っている。病気のときは子どもについてあげたいのは、本当にもうやまやまなんだけれども、余り簡単に休むと結構職場で厳しい、そういったことが多少なりともある。そこを休むかわりにリカバリーしますっていう提案力っていうのもやりつつやってきているっていうのが現状ではある。

病後児とか、今見ると病氣中とか、回復時に2つのところでやってるが、保育園にいたときは公立保育園父母会連合会のほう、父母連のほうも役員をやっていて、学童もそうだが、父母連も毎年保護者にアンケートをとると、病後児保育をもっとふやしてほしいという意見が多い。やっぱり遠方の方なんか、保育園で話したりすると、病氣になった、病院連れてった、空きがあるか確認して病後児の施設に行った。会社に行くってなると、あとお迎えの時間も決まっていると、結局やっぱりお金もかかるし、時間を考えると、病後児があってもフルで働けるかっていうと、働けないっていう状況がある。従って、100%とはいわないが、もうちょっとほしいっていうニーズはあるかなというのは感じている。確かファミリー・サポートは、病氣の子どもは見られない。

- ・病後だったらいいのだが。
- ・インフルも、あとノロウイルス、おなかの風邪のときも大変だなんて思いをした記憶がある。ファミリー・サポート・センターでいうと、事業の説明のところだが、提供会員と依頼会員、で、両方会員の方もいらっしゃると思うが、マッチングのところがとても気になった。平成21年度だと、提供会員数900数に対して、依頼会員が3,000、大体。4倍ぐらい。それに対して25年度だったら提供会員数1,100というところに対して、もう10倍近く依頼会員がいる中でマッチングとかちゃんとできていくのかと思う。本当に1日でも、ちょっとでも休みが惜しい、なかなか立場が弱いところにいると、例えばマッチングでいい方がたまたま見つかりましたってなったら、保育園であれば、まずその保育園と一緒に行って、会員と紹介して、この人に来てもらいますっていうところから、まず仕事を休んでやらなくては、最低限大事なことになるのでやらなくては行けないが、とてもそういう人たちがいるっていうのは大分大きいと思う、ないよりは全然。ただ、ある程度そこは利用する以上は、そこはもうこういうものだとして理解した上でやるのはわかるが、本当にそれこそ、病氣のときも見てもらえたらなとか、マッチングでもっと近くの方が見つかったらなとか、本当にそれは会員の方次第だってところがあると思う。何かいい方向に進んだらいいなとは個人的に思っていた。
- ・この利用の希望と利用経験に差があることに関して、ショートステイとトワイライトの利用経験が少ないことに関して、先日やはり非常に不幸な事件がありまして。もう子どもが大学になっている年なので、そういうような経験が、子育てしているとき、そういうネットが発達していなかったということがある。今は本当にネットで、安易といえは非常に安易な気がするが、子どもを数時間預けただけではなく、もうお泊まりで何時間

か預けさすというようなことが実際に行われている。本当に非常にびっくりした。やはり、このようなきちんとした事業があるにもかかわらず、そういうところに預けてしまう保護者の方々、なぜいるのかなと。ということはやはり、認知されていないということもあるかもしれない。日野で実際そういうふうなことが、事件があったわけではないので、日野でどうなのかということは分からないが、でも日野でもそういうことがあるのではないかとこのように考えてもいいのではないかと。そうすると、認知度を上げるといってもそうだが、利用希望しても、なぜ利用ができないのかなというところがとても気になる。例えばそれは、何かハードルの高さというのが、ハードルが高いこと自体が決して悪いことではないと思うが、今の若い保護者の方のネットに対しての安心感っていうのが私たちと違うところがあるのかもしれない。やはりそこら辺のなぜ利用希望の方が、利用を実際できないのかということに関して知りたい。

→その答えではないが、その利用希望は、アンケートの中で利用できるなら利用したいなというところに丸つけた方で、実際の経験者というのは実際に利用した方ということ。それについては利用希望した人を断っているという数字ではない。実際に我々、ショートステイについては子ども家庭支援センターで受付をし、面談をして使っていただくという形。それについては、基本的には余程のことがないかぎり、つまり余程というのは、市外の方とか、あとは年齢が達してない方、そういうこと以外、利用要件に達している方については基本的には皆さん利用できている。従って、申請をされた方については、ショートステイに関しては利用できているという実績があります。

- ・あとは金額的なものとか、距離とか、いろんなものがあるとは思う。気軽さとかも当然あるでしょうし、安心感というのが人によっては、公的なもので何回も人に顔を合わせてから申請するのが、逆に大変だったりすることもあるので、何度か経験して簡単に利用できるのであればそちら、っていうふうに流れていくのは自然な話かなっていう部分も、やっぱり人の心としては感じることもある。その辺が、安心が担保された上でそれをやるならいいのだけど、そうじゃないのだよっていうところは、やっぱりこれから我々がしっかりと PR していかないといけない部分。公的な機関でやっているものについてはしっかりと人がいて、見ていて、安心と安全を担保できているのだよっていうところをしっかりと示していくことを、これから目指していかなくちゃいけないと思う。
- ・障害児の対応についてだが、例えばショートステイのところ、自治体にとっての課題で、発達障害のある障害と書かれて課題とされていらっしゃるんですけど、実際ショート

ステイは、非常にもう今のお話のとおり、私はハードルの高いものだと思う。障害に当たっては、例えば重度の心身の障害があれば、確実に親が医療を伴っている機関のところにきちっと前もって予約をして預ける、それが普通ですので、重度の障害の子のショートステイを考える必要はないと思うが、ただ発達障害は非常に軽度からある程度重度まであるし、この子たちをショートステイで預けられるかというのは大変に考えられるところだと思う。やはりそこら辺のことは、どこかで対応できるような柔軟さ。というのは、1つは職員の方々がやはりそういう研修をなさってらっしゃるのか、ということもあると思う。それはなさってらっしゃると思うのですが、そういうのも含めてショートステイとか、この中のさまざまの一時預かりとか、トワイライトもそうですけれども、そういう中にぜひ軽度の障害のお子さんのことを組み入れていただきたい。

- ・ファミリー・サポートに関しては、私は重度の障害児のお世話も、ある程度できるのではないかなと思う。障害って本当に人それぞれ、さまざまなので、全く医療的なことを伴わない形のサポートっていうのもあると思う。例えば、その家に行って留守番を2時間ほどするとか、そういう場合、寝たきりの子どもであっても、ある程度わかっていることができることはあると思う。そこら辺のことは当然、誰でもできるということではなくて、会員さんの間のこの人だったらということがあると思うので、そういう関係性をつくっていく中で是非していただければなというふうに思っている。実は私も提供会員になっており、それで22年度ぐらいだが、提供会員の登録をした上で育児だったので、5日間ぐらいの講習会あり、それに出させていただいて登録をしているが、今に至るまで1回も声がかかったことない。私も忙しくて私のほうから言っていないが、やはりここら辺の整備も、提供会員の方が今どんな感じで実際できる状況なのかとか、続けていける意思があるのかということの整理も必要かなというふうにも思う。
- ・それから、やはりその中では障害のある子を一緒に、保護者で経験のある方もいらっしやると思うので、そういうことをうまく使いながら、なるべく障害を持っている家庭のサポートをできるような体制をつくっていただきたいと思う。
- ・ファミサポについては、実際、発達障害の方、重度の方、そういう方々の対応を何年前から、数は少ないけどさせていただいている。今、発達障害の方、通級の送り迎えっていう形もある。
- ・重度はやっていないということ聞いたが。
- ・やれる場合はやらせていただいている。でも、それもケース・バイ・ケースで安全が確

保されるだけだが、絶対やらないってことでもない。

- ・今回の国から出ている指針の中で、量の見込みと人の確保というのが非常に大事だということ、こういう資料用意されて。ここのなかなか合わない部分があるというところは、今までの皆さんの御経験と、さまざまな知見できっちりとしたものを多分、計画は代案をつくっていただけるだろうと信じている。
- ・確かに日本の人口が減っていく中で、去年、労働参加率はふえているっていう話を聞いていて。もう明らかに高齢者の方々と多分、女性の社会参加っていうのが促進されてきているだろうなと。今後の日本を考えると、そこがとても大事だというのは個人的にも非常によくわかる。そこに国も、あと行政も力を入れてくというのは賛成だし、それはもちろん応援していきたいと思っている。ただ、そこだけが子ども・子育ての視点でやっていくのかというと、疑問でして、何よりも子ども自身の視点が欠けているということと、親は決して働いている親だけではないというような、我々の働いている親で、働きたいという方が働けるといえるのはとてもとても大事なことで応援したいが、そういう子育てじゃないということをしてほしいという親もいまして。私たちの活動なんかだと、逆にそういう親とたくさん接する機会が多いので、こういうものを見たり、いろんな新聞を読んでいても、どうも国の出しているのはなぜか働く人の、いわば親の都合の部分だけのことしかやってなくて、じゃ、子ども自身のこととか、この町でこういう子育てをしたいのだけだと思っている親の意見や、そういう活動をこれからどこに盛り込まれていくのかなということがとても不安に思う。
- ・この前につくった、ひのっ子すくすくプランの中では、理念というところで、やはり子育てなので子どもが中心にあるんですけど、でも頑張って親は子育てをしていて、まさに1人だとわからない、情報がないからわからないとかっていうところなので、やはり親同士がつながって、いろいろと助け合ったりできるとか、そういうことができたり、それを助ける、要は親と親がつながれるような地域がいいよねと。その中で安心して一緒に子育てができるといいよねっていうことで、親育ちで、あとは地域育ちだったかな、で、親育ち、地域育ち、子育てっていうのを理念の中心に据えて、こういうことも大事だし、やはり人と人がつながって行って、一緒に地域で育てていくっていうまちにしたいという理念をつくった。
- ・私自身も子育てをしていて思うのは、実はこういうサービス、だんだん、だんだん親同士がつながってくと、使えなくなってく面があったりして、お互いに「ちょっと忙しい

から、きょう子ども見て」とか「じゃあ、きょうはこっちで預かるよ」みたいなことができたりする関係ができると、行政のサービスに頼らなくても市民同士がまさに共助っていうのですか、行政も掲げてらっしゃる。そういう部分が育っていくっていうのがあるし、先ほども預けるのにハードルは何でしょうってあったが、私も1歳と、4歳と、7歳の子どもがるので、預けるハードルは子ども自身が安心してその場にいられるかどうか。それが安心できないと、やはり子どもをなかなか預けるっていう気にならないから、やはり預けた先に子ども同士が仲よくなっていたり、その親との関係がもう子どもにあったりすると、それはほかの人の家族でも預けやすかったり、でも、そういう関係を築ける人ばかりじゃないから、やはりこういう制度があって、やはり利用できる場もとてもとても大事だと思う。決してこういうことを否定するつもりも、これがだめだっていうつもりもないが、これ以外じゃない部分の子育て、地域の育て方という部分が必要あるはずで、先ほど子どもの視線で言えば、子どものニーズは思いっきり遊びたいだけ。できれば外で、思いっきり遊びたい。それは多分、学童の子でも、例えば高学年になればなるほど、室内じゃもう力もあり余ってという部分もあるでしょうから、そういう場がでも、どんどんどんどんなくなっていつている。そういうところは今後何かこの会議では語られていくのかなとか、意見を出していけるのかなとか、そういう部分があるし。国が出している方針に全くそういうところが欠けているから、皆さんが用意するのはこうなるのはわかるが、ぜひ日野市はそうならないように、せっかくすくすくプランで描いた理念で、いい部分がたくさんたくさんあるので、そういうものを継承していくような形で、私は皆さんと一緒にこのまちで子育てをしたいですし、法人をやりたいと思っています。

- ・トワイライトとショートステイ、例えば使ってみたい人があっても、利用件数が少ないことについては、私もずっと働いているので、フルで。朝も、昼も、夜もなく、出張もあるし、そういう仕事をずっとしている人間からすれば、子どもから見てどんな子育てをしてほしいかってことがわかっていても、なかなかやっぱりできない。そういうときにやはりトワイライトとか、ショートステイもそうで、例えば先ほどのこういうハンドブック、こういったものがあることすら知らなかったし、それはきっと出している側から見た形だと、こんなにいろんなものを出していて、役所に聞けば全てのことがわかるのに、なぜ利用しないのだって思うと思う。でも、やはりこちら側からすると、どこに連絡すればそういうことがわかるのか、そもそもそういうものがあるってことすらわか

らないので、何とか自分で自分のうちだけでどうにかしなければっていうふうに、やっぱり思っている人たちもきっとたくさんいるし、子どもを預けること、特に夜だとか、宿泊だとか、預けることへの罪悪感っていうのがとてもある。なるべくそういうことをしないように、要するにあそこのうちはお母さんも働いていて、夜もないから外に預けているのだって思われまいようにと思って預けない。

- ・ どうにかしてくるっていう人も多分いると思う。それに対して、今の先ほどの事件があった話みたいに、簡単に携帯とかで預けられるようなものあれば、人に何か言われることもなくできるじゃないかとか、そういうのもあるのかもしれないなって少し思った。
- ・ やはりいろんな事業をしてくというのは、そこで必ず働く人が必要になってきて、そこには例えばどういうふうにお金を使っていくのか、ますます今、人不足っていうのがある。人が採れない状況。特に医療、介護、福祉については、なおさら皆さん働きたがらない。過酷な労働環境等の、お給料が安いっていう、その中で、例えばボランティアの方がたくさんいて、やってくださる方っていうのがふえれば一番いいけども、そうじゃない部分では多分、市のほうでも決められた財政の中でやってかなくちゃいけないっていったときに、もうあれも、これもやるっていうのはなかなか難しいのではないのかなっていうふうに思った。その中でもやっぱり大事なものは残して、そうじゃないものは精査していく、その必要はあるのかなって少し思った。
- ・ この制度をつくる時誰が主人公なのかなというのを見失わないようにしなきゃいけない。日野市でも、私たちでもよく言っているように、自助、公助、共助。この3点をバランスよくやんなきゃいけないのと、あと今回は公助の政策をタッチするわけだが、誰が主人公というのと、この自助、公助、共助のバランスをとっていかなきゃいけないというのを、ここにおられる各いろんなセクションの代表の方ですから、そこを見失ってはいけないなというふうに思う。
- ・ それから、目的だとか、方策も、きちんと市のほうでつくるのか、こういう部会でつくっていくのかというのがあるけど、それもきちんと最初のほうにつくっていかないと、例えば目的は、さっき言ったような誰が主人公だとか、支援をどのようにつくっていくかみたいところ。スケジュールももう決まっているのだろうけど。それからもう1つ、方策のほうでは優先順位。さっきこのデータを見ると、やはりちょっとわかりやすかったのは、親御さんが困っている状況のところでは使用率が高いとか、病児の内容だとか、子どもさんの病気の内容だとかつつうのはかなり使用頻度が高くなっているの、そう

いった分析なんかもかなりやってかなきゃいけないなというふうには思う。今日はこの細かなデータの回答だとか言わないが、この制度、誰が主人公になってくかっていうのは非常に大事だと思って。私も子どもの時代があった。それから親の時代もあった、今は客観的に、子どもが30代になっているから、今度は子どもがその年代に、僕はこの年代に来ているから、そのフォローもしなきゃいけないということで、この役割を受けた。もう皆さんと御存じのように、誰が主人公、そこをちょっと念頭に考えていかなきゃいけないというふうと思う。

- ・国のカテゴリーに基づいて、いろんな子どもを支援する事業ということで、市のほうで分析された資料を見せていただいて、それを見ながら、自分がかかわっていることの中で直接結びつくことについてから、少しお話を触れさせていただきたいというふうと思う。まず、学校という立場からすると、子ども家庭支援センターさんのどういうことで使われているかということの中に、相談件数の中で最も多いというのが養育不安であると。次に多いのは、基本的生活習慣であるというような部分がある。これは保護者の方も子どもとどう向き合えばいいかということが、1つ不安材料として底流に非常に強くあるということ、押さえていかなければいけないと思う。
- ・この中でいろんなお子さんについてのサポート事業があるわけだが、ここで基本として考えておかなければいけないことは、学校ではこの中の要素の中で1つだけ、学校に関係あるなと思ったのは、放課後児童健全育成事業というのがあって、これは放課後子どもプランということで、授業が終わった後の子どもについて、ボランティアの方が見てくださるという事業があるわけだが、その中のことを思い浮かべながら考えると、1つはサービスを受けられるということで、非常にありがたいなということはあると思う。その中でも後のほうで細かく出てくる中で、病気になったときや、親御さんが養育できないときに受け皿になってくれるような、そういう場所もあるし、受け皿もあるということはわかってきたわけだが、その中で預けてしまえば、あとの責任は受けた側にあるというような発想は、ぜひ線引きはする必要があるのではないかなと思う。それは実際に学校の現場の中で、もう預けてしまうと実際預かった側で起きたことっていうのは、全てその責任になってしまうということで、その家庭の中では子ども同士の問題だとか、それを親御さんが的確に把握していないからっていうようなことでの問題っていうのは結構ある。ですから、基本にしていかなければいけないことは、やはり保護者がしっかりと子どもについての養育の姿勢を持つというところは、絶対にこれは大事にし

ていかなければいけないと。その中でどうしても都合のつかないことについては、そういう手助けができるのだということで、それを幾つかの手だての中でいろんな方法として、いろんなものが用意されているというふうな解釈をするのが一番いいのかなというふうに思って聞いていた。

- ・学校だと、意外に職員のほうが使っているのは、時間外の保育事業であるとか、それからショートステイなんかも結構使っている。当然ながら、病気になったりすれば夜間でも見てくださるとか、そういうものもあるので、そういったことで少し自分の視点から色分けをしながら、それぞれの事業を考えてみるということも必要なことではないか、ただ、十分な理解ができていないというところで、貴重な資料を御提示いただいたということで特に感謝しなければいけないのかなというふうに思っている。ちょっと思いつきのままに話したので、まとまりのない話で大変恐縮だったのだが、いろいろ勉強させていただいたということと、基本はやはり保護者がやっぱり養育するっていう、その線は絶対引かないでほしいなというふうに思っている。
- ・非常に複雑な気持ちと、非常にいいデータをいただいたということと、私、健康福祉部にいたので、障害児であるとか、貧困の低所得者の御家庭であるとか、そういうジャンルと高齢者というところを見てきたので、非常にいい勉強になったことと、たまたまうちの娘がこれを預かる側にいて、親御さんの都合でいつも帰ってくる時間が不定期であるという家庭内の問題を持って、保育をやめようかという家庭の父親。従って、お酒のにおいがして仕事だって言って遅く帰る、で、来る。その子を預かっていなきゃいけない、それはまさに今、先生が言われた、子育ては親が基本で、その支援だっていう視点がこの中に入っていてほしいなという思いはした。
- ・福祉をやっている中で、生活介護をやってらっしゃる方はもうほぼ決まったところでやっちはいるのだが、そうでない、今度、発達支援センター、そういうところにも登録も何もない子どもたちをどう対応してくかってことも、支援という中で考えられればいいなとは思っている。
- ・今後に期待をしたいというところで、その検討していく中で、今日出たいろいろな意見をぜひ参考にさせていただければというふうに思う。私も先ほど、誰が主人公かっていう話を2人がされて、誰が主人公なのだろうっていうふうに今さらのように思ったりするが、保護者の問題。そういうこともやっぱり目を配っていかなくてはいけないと思う。
- ・前に子ども・子育て支援新制度についてという講演会というか、勉強会みたいなときに、

スタッフの方からいただいた資料の3ページ目に、子ども・子育て支援の意義のポイントというページがあり、一番最初に子どもの最善の利益が実現される社会を目指す、との考え方を基本にする、その次の次に、「子ども・子育て支援とは保護者が子育てについての第一義的責任を有することを前提としつつ、上記の環境の変化を踏まえ、地域や社会が保護者に寄り添い、子育てに対する負担や不安、孤立感を和らげることを通じて、保護者が自己肯定感を持ちながら子どもと向き合える環境を整え、親としての成長を支援し、子育てや子どもの成長に喜びや生きがいを感じることができるような支援をしていくことである」と書いてあったので、ちょっとほっとしたというか、やっぱり親の自己肯定感を持つことがやっぱり、その後の子どもの育ちを一番身近なところで支援していくのだなっていう思いを、これを見ながら新たにして、この会もそういう会でありたいなっていうふうに思った。

6 閉会